

# 日本ハンセン病社会事業史研究（第3報）

— 治療解放主義の系譜（榮生病院）の検討 —

平 田 勝 政

A Study on History of Social Work for Hansen's Disease Patients in Japan (3)

Katsumasa HIRATA

長崎大学教育学部紀要－教育科学－ 第75号 別刷

2011年3月

Reprinted from Bulletin of Faculty of Education

Nagasaki University : Educational Science, No. 75 (2011)

## 日本ハンセン病社会事業史研究 (第3報)

### — 治療解放主義の系譜 (楽生病院) の検討 —

平 田 勝 政\*

#### A Study on History of Social Work for Hansen's Disease Patients in Japan (3)

Katsumasa HIRATA

##### 1. 研究の目的と方法

なぜ日本ではハンセン病患者が国際動向から乖離して90年の長きにわたり隔離を強制され続けたのか、日本はどこで道を間違えたのか、その真相究明作業は未だ十分とはいえない。本研究は、日本のハンセン病社会事業の在り方に決定的な相違をもたらす隔離監禁主義と治療解放主義に注目して、この2つの考え方の成立・展開と相克の過程を、未解明な点の多い1920年代に重点を置きながら解明しようとする一連の研究の続報である<sup>1)</sup>。

本研究では、ディーン博士来日 (1922年) の影響を検討した拙稿 (2009b) をふまえ、その来日以降から1930年代初頭までにおける治療解放主義の系譜・動向を整理・検討しようとするものである。主な研究対象としては、①「社会事業研究」第15巻第1号 (1927.1) が「治療本位の癩病院建設」という見出しで報じている竹内勅の楽生病院、②国立ハンセン病資料館の「歴史展示」(2010年3月現在)の中で「隔離を批判した医師たち」(3人)の一人として太田正雄・小笠原登と並んで登場する青木大勇 (長崎皮膚科病院長)、③山本俊一著『日本らい史』(122～126頁)が一定の整理・解明をしている第四区大島療養所・第五区九州療養所等が提起・推進した軽快患者の退所問題、等が挙げられるが、本研究では未解明な点の多い上記①の楽生病院に限定して検討する。主な先行研究としては、兵庫社会福祉協議会 (1971) の『福祉の灯 兵庫県社会事業先覚者伝』中の「大野悦子」や森幹郎 (1996) の『足跡は消えても』(ヨルダン社)中の「第16章 明石の楽生病院と大野悦子」などがある。しかし、それらは明石楽生病院 (分院) に限定されており、楽生病院 (本院=福岡、分院=明石) 全体を視野に入れた検討はいまだなされていない。特に本院である福岡楽生病院とその院長・竹内勅については、ディーン博士来日の事実とその治療解放主義の考え方がほとんど無視されてきたと同様の扱いを受けて研究されることもなく今日に至っている。一次史料に乏しいが、この間の調査で発掘・収集した資料を手がかりに、全体像の把握への一歩としたい。

なお、すでに「癩」などの表記に見られるように、人権尊重の見地からすると不適切な用語が使用されているが、以下でも歴史的用語として原文のまま引用することをお断りしておく。

---

\*人間発達講座

## 2. 1922年のディーン博士来日と竹内勅の楽生病院

福岡市で開業する「癩病」専門の楽生病院（九州帝国大学医学部附属病院西隣）を経営する竹内勅については不明な点が多いが、福岡・博多が誇り得る「名士」を集めた『福博の人物』<sup>2)</sup>では、まずその略歴が次のように記されている。

「氏は、明治十二年鹿児島日置郡に生る。郷里の中学を卒へるや、医学の志望を抱いて熊本医学専門学校に学び、氏の怜悯な研究心は在学中秀才の名を以て一貫するに至った。卒へて郷里に帰り開業し、大いに郷党の為に『仁術』を尽して来た。斯くして福岡の人となり楽生病院を開業し、今日に至る（後略）。」

その楽生病院と竹内勅（院長）の名が広く知られる契機は、1922年のディーン博士来日の際、竹内が上京して同博士と「癩病」治療をめぐる会見し、そのことが「東京朝日新聞」等の新聞で全国規模で報道されたことによる。当時の報道<sup>3)</sup>をまとめると、竹内は、1922年10月30日、洪澤栄一の秘書（小島氏）の紹介で、ディーン博士と「癩病治療に就て」約2時間（3時間とも報道）に亘る会見をおこない、「9年ばかり前」（1913年頃）から「或る薬草を発見して臨床上に実験したところ意外な好成績を上げた」こと、「その九年間に経験した成績に依ると百人中七十人乃至八十人は確かに治療せしめて居る」こと、その薬液を「化学的に研究して広く不幸な病人の為に提供したい」こと等を伝えた。また、治療により全治し、1922年5月の徴兵検査で甲種合格をした「熊本県の三島某」を同行させ、本人をディーン博士に直接見せ驚かせた。ディーン博士は、三島某の身体を検査した後、次のように語ったという。

「私がハワイで注射して居る大楓子油エチルエステル治療薬で二割五分の効果を納めて居るが、これは治癒したものとはいはれない。即ち血液を顕微鏡で見ても感染しない程度になればたとひ外見が腐っていてもよろしいとして居るが、竹内氏の薬は全然別のものであり、血液を顕微鏡では調べたことはないようだが、外見から見てすっかり癒って居るから驚く。而も七十乃至八十パーセントの治癒者がある。私は、竹内氏の許しを得てあの薬を布哇へ持ち帰って注射し、若し私達の薬より効果があつたならば、世界に発表したい考えです。私の旅行はあまり余裕はないので、是非竹内氏の療室も見たくなったから帝国大学の姉崎博士に案内して戴いて福岡まで行く事にしました。」<sup>4)</sup>

このように述べて強い興味を示し、福岡楽生病院視察を日程に組み入れて、1922年11月13日に福岡入りした。翌14日午前11時より「九大医学部を訪問し高山医学部長の案内により皮膚科教室を視察し、同教室にて高木博士、本間助手より種々説明を聴取し、尚ほ同教室で治療中の癩病患者入院中の病室を親しく観察した。高木博士は、同教室で使用中のディーン博士処方癩病特効薬大楓子油製剤が布哇では二十五パーセントの利目あるに比して当大学では一向利き目なき事を語り、局量其他について談合し、尚ほディーン博士が持参した薬剤を貰ひ受け試験する事を約した。」<sup>5)</sup>という。さらに午後から基礎医学教室、工学部、農学部を視察し、その日の「午後四時過ぎ福岡市外大学通り楽生病院を訪ひ、竹内院長発見の癩病新薬及び同薬を注射して治療中の患者十二名を選んで診察し、詳細にディーン博士発見の大楓子油薬と比較して竹内院長の説明を聞き、右新薬は竹内氏が日本の学会で発表すると同時にディーン博士大楓子油と比較研究することを約し」た<sup>6)</sup>。ディーン博士の視察を受けて、竹内院長は、次のように語った。

「九大真野総長、姉崎博士、洪澤子爵等の紹介を経て、ディーン博士の来院を見るに至つ

たが私の癩病新薬は全然ディン博士の大楓子油より得たものとは異り、目下の処九十パーセント以上効果を見て居り患者の如きも六ヶ月より永く入院する必要はない。此薬は、十五年前より研究に着手し、九年前より患者に使用し、臨床上の効果ある実例は充分に有して居り自信もあるが、未だ細菌学上の研究が未了であるから、研究が終り次第学会に発表する考えである。ディン博士も此新薬を欲しかった模様であるが、何れ学会発表と同時にディン博士の許に送り充分博士発見の新薬と比較研究して呉れる約束が出来た。目下の処未だ私の此新薬は公表する時機でない云々」<sup>7)</sup>

以上に見たディン博士と竹内勅との遣り取りから言えることは、竹内勅は、「癩病」治療薬を開発して「広く不幸な病人の為に提供」したいという願いが行動の基本であり、後述の賀川豊彦著『東雲は瞬く』の中で「楽生医院」という名を出して暗にモデルとして描かれているような不純な動機で創製した「癩病」治療薬で大儲けを企むことに積極的に同調・協力する人物とは言い難い。竹内は、後に福岡市の市会議員（1933年当選）になり、前出の『福博の人物』（1935年）の中で、「自由の見地に在って真に市政刷新の雄、温厚篤実の仁術者」（顔写真入：肩書きは、市会議員・楽生病院長）という見出しで取り上げられ、「稀に見る高潔な人格者」と評価されている。さらに『福博の人物』は、楽生病院を、「世に在り振れた病院のそれとは異なり、最も人の嫌ふ特種病患者の診療に当る病院である」と認識した上で、そういう病院の院長であるだけに「氏（＝竹内）が特に仁術の精神を以てするは勿論、常に犠牲的精神を以て事に精進する」人物として理解され、「市会の衆望を鍾める」存在となっている、と記している。

このように見てくると、福岡楽生病院は、竹内が1907年頃から本格的に「癩病」治療薬の開発研究に着手し、1913年頃から実際治療を開始して以降、1935年まで「癩病」専門病院として地域から迫害（排除）されることなく福岡市内及び近隣（姪浜）で開業し続け、人望を得ていたことが確認できる（1935年以降は不明）。

### 3. 1920年代における私立「癩病院」・売薬の動向と楽生病院の積極的展開

次に、1920年代の新聞広告を手がかりに私立「癩病院」と「癩病」治療薬（売薬）を概観する。戦前日本の私立ハンセン病療養所等については、『近現代日本ハンセン病問題資料集成』（補巻6）で訓覇浩氏が先行研究をふまえて一覧表を作成し解説をおこなっているが、筆者による1920年代～1930年代初頭の新聞調査によれば、さらに①楽生病院（福岡）、②小笠原病院（大阪）・分院（広島）、③日月堂医院（名古屋）などの「癩病」治療専門の病院（医院）の存在が新聞広告から確認できる。その他にも、長崎皮膚科病院のように「癩病」治療専門とは看板に明示しないが、積極的に治療・研究に取り組んだ皮膚科病院（医院）が存在した可能性がある。

売薬の広告では、①「癩病の話」（福田秋水）：東京、②「らい病」（長江薬房）：愛知、③「らい病」（大福堂薬房）：京都、④「らい病特効新薬エクルーモ」（小西伊兵衛商店）：大阪、⑤「らい」（不思議草）：大阪、⑥「家伝・らい病薬」（石井佐兵衛）：神戸、⑦「らい病」（蓮照寺）：福岡、などがある。湯治場の広告としては、①「らい病」（太平館）、②「らい病」（養老館・渡邊千代）、③「らい病」（松村屋小文次）、④「らい病」（角屋療養園）があり、すべて群馬県の草津温泉からの広告である。上記の売薬の中で、最も宣伝量が多いのが①の福田秋水であり、台湾にまで及んでいる。なお、定評のある大阪・堺の岡

村平兵衛の大風子油の広告は、未だ見ていない。

私立「癲病院」と売薬の広告宣伝が氾濫する中で、最も注目され話題になったのが前述の竹内勅が経営する楽生病院であり、竹内創製の注射液（製法は秘密）による治療効果であった。米国MTL幹事のダンナーが来日（1925年11月）した際にも、明石楽生病院を視察（1925年12月頃：推定）しているように、一目置かれた私立有料病院であった。視察したダンナーは、患者に接して、その治療成績に驚き、「癲病院にまいりますものは、片道の汽車賃しか用意しません。再び故郷に帰られないということからであります。しかし此処へ来られた方は、往復の汽車賃が必要です」<sup>8)</sup>と語ったという。

楽生病院の評判が高まる中で、「主婦之友」10巻3号（1926.3）は、「癲病が治って歓喜する人々の実話」と題する取材記事（明石楽生病院の全景写真と治療前・後の比較顔写真入）を掲載した。その中で、竹内は、創製の「薬品を臨床上に用いて既に十年、全治の喜びを得た者が本院分院を通じて九百名の多きを算し、最近二年間の成績は施療患者の八割以上を治療している。」<sup>9)</sup>と述べている。それに続いて櫻根孝之進（大阪医科大学皮膚科医長）による「竹内氏の薬が、根治上にどれだけの効果があるか断言できませんが、その初期の者に対しては、たしかに効果があることを認めます」との談話も掲載された。なお櫻根は、「無闇にこの病気を恐れて、これを忌み、一人の患者のために、一族が排斥を受けるといふやうなことは、乱暴極まる話で、むしろ肺病より危険が少ないといふことを、よく承知してもらひたい」と述べて、談話を締め括っている<sup>10)</sup>。

「社団法人明石叢生病院設立許可申請書」（1927年5月申請）<sup>11)</sup>の「本院既往の経過」によれば、1923年9月の開設から1927年4月までの明石楽生病院の変遷は、下記のとおりである。

1923（大正12）年度	9月開設（収容力32名）。以後患者1ヶ月平均5名を収容治療。
1924（大正13）年度	毎月患者平均12名（内2名は無料収容で、雑役に使用）。
1925（大正14）年度	毎月患者平均22名（内無料および実費患者12名を収容）
1926（大正15）年度	一般に治療効果が知られ、入院希望者激増のため病舎増築（60名までの収容力を完成）。
1927（昭和2）年度	4月までの段階で、1ヶ月平均50名の入院（内16名は施療、22名は実費）。また開院以来の収容患者数は、224名で、退院者169名（全治39名、事故130名）、死亡者2名であった。5月現在の入院患者は、有料15名、無料16名、実費22名。

上記一覧表から明らかなように、「主婦之友」（1926年3月号）の記事が契機となって、「一般に治療効果が知られ、入院希望者激増」となり、1926年後半から1927年初頭にかけて竹内は、「従来の隔離救済の如き消極式的もの」ではなく、「竹内液」と称される「家伝の注射薬に依て根本的に治療を施し、之に依て再発を防遏し真に全治させる」ことを目的に治療本位の取り組みを活発化させ、福岡の「楽生病院を始め、東京、大阪、明石、福岡市外姪浜の四分院」に事業を拡大させた<sup>12)</sup>。具体的には、明石楽生病院の病舎増築・増床（32床から60床へ）だけでなく、姪浜の喜楽園（既に1925年頃開設）や大阪診療所（東京は未確認）が開設されている。この事業拡大は、「京阪の某氏」＝福島玉吉（＝『東雲は瞬く』に登場する大友惣兵衛）が営利目的で介在したと判断されるが、竹内は1927年4



月までには、「竹内葉」の不足か、経営上の問題か、理由は定かではないが明石・大阪等から撤退し、福岡（福岡市内の楽生病院と分院の姪浜・喜楽園）を拠点に「癩病」治療を継続していく。

明石楽生病院の方は、従来の営利目的の病院から賀川豊彦等の援助を得て「社団法人明石叢生病院」と改称して、「治療及救済」を目的とする病院への転換を試みたが、頓挫し、やがて経営難が深刻化していく。賀川豊彦の「東雲は瞬く」（「主婦之友」に12回連載：1930.8~1931.7）は、明石楽生病院への財政支援が目的の執筆であったとされる。また同時期に、「社団法人明石叢生病院」の申請人（賀川豊彦・魚住伊蔵ら）を中心に神戸MTL協会が設立（1930年5月頃：詳細不明）<sup>13)</sup>されており、同じ意図で組織されたものと判断できる。

#### 4. 「光栄」の福岡楽生病院（萩原水登）と「凋落」の明石楽生病院（大野悦子）

1930年8月9日の貞明皇后の「御沙汰」を受けて、同年11月10日に発表された「癩病」患者救護の功労者・献身的奉仕者への皇太后による表彰者81名中に「看護婦 萩原水登」の名がある（次頁の表1参照、目下81名中80名を確認）。「北部保養院…、（同）看護婦 萩原水登」と記した誤報の新聞が多く、あるいは主要人物中心の報道や地元に関係する人物に限定した報道のためにほとんど知られていない事実である。表彰された「看護婦 萩原水登」は、福岡楽生病院の看護婦（勤続15年）であり、全国有料病院から選ばれた唯一の功労者であった。この事実は、内務省・宮内省が、事前調査に基づき萩原水登の存在と福岡楽生病院の果たしてきた役割を高く評価したことを意味する。また萩原水登（表1-No.11）は、三上千代（同No.10）と同等（共にB）に扱われている点にも注目したい。受賞報道記事<sup>14)</sup>の中で、受賞の喜びを萩原水登（顔写真入）は、次のように語った。

「私が不肖な身で光栄に浴しました事は何とも有難く私自身は素より一家一門の名誉であります。私は鹿児島県日置郡串木野に生まれ、本年三九歳になります。大正四年福岡県の看護婦試験に及第した後、楽生病院に於て院長竹内先生の下に看護婦を務め十余年になりますが、世にも可哀そうな癩病患者の友として色々世話を致して居りますが、私の病院の治療薬が非常に効果があってドシンドシ難治の患者が全快して行くのを見ると我事のやうに嬉しくあります。私は今回の光栄に感激して畢生癩患者の為に尽くしたいと考えて居ます。」

続いて院長の竹内勅は、次のように語った。

「私の病院から光栄の看護婦を出した事は此上もない栄誉であります。私の病院は明治四十四年以來私独特の注射薬で治療し今日まで二千余名を治療し、聊か難病癩治療に世間に認められました。私は癩病は必ずしも難治に非ず必ず全快するといふ固き信念の下に進んで来ましたが、今回の光栄に感激して、より以上に治療効果を収めたいと考えて居ます。萩原さんは、全く私の片手とも頼み、患者の信頼を受けて宛も慈母の如く患者から敬愛されて居ます。今回の光栄は、萩原女史のみに非ず、私の病院にとって此上もない栄誉であります。」

その後も竹内勅の「癩病」治療は注目され、1931年12月には、「無名の開業医が癩病薬発明、功績一般に認められる、ハワイより招聘の申込」という見出しで下記のように新聞報道されている。竹内勅に関する情報が乏しいこともあり、今後の研究の手がかりのため長いが全文を引用する。

「（東京電話）従来不治の病とされている癩病に対してその世界的対症薬ともいふべき大楓子油剤

表1 貞明皇后の「御沙汰」による「救癪」功勞の表彰者一覧（1930年11月10日）

No	施設名（所在地）	公私別	表 彰 者 名		
			(A) 銀花瓶一個と金一封	(B) 蒔絵硯箱一個と金一封	(C) 金一封
1	全 生 病 院（東京）	公立	光田 健輔（院長） 林 芳信（医員）	石渡 こと（看護婦長） 後澤 長四郎（看護長） 比留間太郎作（看護人） 川島 盛昇（看護人） 横田 久（主事）	市川 芳蔵（備人） 田中清十郎（備人） 中村 勇吉（備人） 毛 涯 鴻（書記） 海老澤栄吉（備人） 久保 歌郎（病院雇） 福井 鎌吉（機関手）
2	北 部 保 養 院（青森）	公立	中條 資俊（院長） 佐藤 良春（医員）	飛鳥 邦三郎（看護長） 成田 巻之助（看護員） 尾坂 泰（書記） 白鳥 政太郎（看護員） 平井 敏行（看護員） 鈴木 貫二（看護員） 成田 サダ（看護員）	須藤 恭造（書記） 成田 誠三（巡視）
3	外 島 保 養 院（大阪）	公立	村田 正太（院長） 桜井 方策（医員）	石原 与茂一（看護人） 小谷 虎次（看護人） 石田 豊三郎（看護人） 雑賀 しず（看護婦長） 青山 裕信（看護員）	藤原 恒吉（書記） 虫明岩次郎（院雇）
4	大 島 療 養 所（香川）	公立	小林 和三郎（所長）	久米 キネ（看護婦長） 森 市助（看護手） 川上 清太郎（調剤員）	乙竹 次郎（書記） 多田 四郎（書記） 寿 九市（船長） 澤井佐平次（機関長） 牧谷 庄松（備人）
5	九 州 療 養 所（熊本）	公立	河村 正之（所長）	高木 万里（医員） 毛利 スエカ（看護婦） 山内 ハツエ（看護婦） 石坂 音三（調剤員助手） 山内 栄（調剤員助手） 大高 徳次（看護員） 山住 熊喜（看護員）	坂本 松熊（書記）
6	慰 廬 園（東京）	私立	大塚 かね（主事補） 和田 秀豊（園主）	塩谷 つね（事務員） 後藤 勝海（事務員）	
7	身 延 深 敬 病 院（山梨）	私立	網脇 龍妙（院長）		
8	神 山 復 生 院（静岡）	私立	(故) ドルフール・レゼー（院長） 楠 豊吉（幹事）	井深 八重（看護婦）	
9	草津聖バルナバ医院（群馬）	私立	コンウォール・リー（院主）	山中 政三（執事） 貫 民之助（伝道師）	
10	鈴 蘭 園（群馬）	私立		三上 千代（園主）	
11	( 無 記 名 )			荻原 水登（看護婦）	
12	熊 本 回 春 病 院（熊本）	私立	ハンナ・リデル（院長）	飛松 甚吾（書記） 中川 清（書記） 阿部 伊代（伝道師）	
13	待 労 院（熊本）	私立	マリー・アボリナリア（院長）	マリーバチリエン（看護婦） 山部 久雄（事務員）	
14	台湾総督府癪療養所（台湾）	公立	上川 豊（所長）		
15	馬 偕 医 院（台湾）	私立	ジー・グシュー・ティラー（院長）		
16	小 鹿 島 慈 恵 病 院（朝鮮）	私立	矢澤 俊一郎（院長）		朴 生 斗（備人）
17	大 邱 癪 病 院（朝鮮）	私立	アチバルト・グレイ・フレッチャー（院長）		
18	釜 山 癪 病 院（朝鮮）	私立	ゼノーブル・マッケンジー（院長）		金 守 弘（事務員）
19	ピーダーワルフ癪病院（朝鮮）	私立	ロバートマントン・ウィルソン（院長）		
合 計（81名）			計22名	計39名	計19名

の効果を疑はしめ、いはゆる竹内式注射液を発明して九十パーセントの治癒率を示したといはれる福岡市九州医大病院隣の衆生病院長竹内勅氏の癪治療の功績はようやく一般に認めらるに至り、昨年度畏くも皇太后陛下が癪病予防功勞者に記念品および金一封を御下賜になって御表彰遊ばされた際には全国ただ一人の普通有料病院従事者として同院の看護婦萩原とみ女史がこの光榮に浴したほどで、爾来竹内氏が右の有がたき思召しに感激し適当の地を選び治療所の建設を思ひ立ったところ、神奈川県下足柄下部その他から敷地提供の申出あり。更に全国的に勢力を有する京都の某宗教団体にも協力援助して癪病撲滅に乗り出すことになったと伝えられている。折柄最近世界の癪病国とい

はれるハワイより竹内氏を招聘したき旨申込んで来た。同氏は医専を出たのみで別に学位をもため一開業医でありながら、既に大正八年以来七回に亘り各医科大学及び各地の医学界に治癒の実例を発表して学界にセンセーションを起したことあり、ハワイよりの今回の招聘は日本の癩病予防方面の世界的進出として注目されている。」<sup>15)</sup>

1932年に明石楽生病院（分院）の方は、後述の『東雲は瞬く』に描写されているように大野悦子らによる悪戦苦闘の経営努力にもかかわらず閉鎖を余儀なくされ、患者は長島愛生園に移ったが、福岡楽生病院（本院）の方は、十坪住宅運動（強制隔離）が強まっていく1933年の段階でも健在であった。「婦人公論」18巻5号（1933.5）は、「忘れたやうに癩病を癒した父と私」（新田とみ）を掲載し、新田により福岡楽生病院附属希楽園（姪浜）での入院治療生活と全快の様子（写真入）が紹介され、「私は今癩は不治に非ずと信じる様になりました」と書き記した。新田の手記に続いて、野木繁太の「天刑病者への太陽－癩は不治に非ず－」が掲載され、「竹内液」創製の経緯やその効能等が詳述しないが丁寧に紹介されている。

この「婦人公論」の記事に対し、日本MTLは同機関誌第28号（1933.6）において、「大風子生」（＝塩沼英之助）の署名で「某婦人雑誌の『癩病を癒した話』」と題して、過大な治療効果の宣伝を批判している。このことは、竹内と福岡楽生病院が、隔離主義運動（十坪住宅運動）が本格化していく時代状況の中にあっても、無視できない異端の存在としてマークされ続けていたことを示すとともに、「癩病」をめぐる不治か治癒可能かという根本的な問いへの答えを出す議論の必要性を高める役割を果たしたといえる。その表れが、1933年11月の第6回日本癩学会（11.4～5）を好機として、日本MTLの主催で開催された「癩学会懇談会」（11.5）であり、詳述しないがそこでの「癩治療薬問答」であった<sup>16)</sup>。

## 5. 賀川豊彦の小説『東雲は瞬く』と楽生病院

上述の「婦人公論」（1933年5月号）に対する塩沼の批判が「日本MTL」第28号に掲載されたと同じ1933年6月に出版されたのが、賀川豊彦（日本MTL理事）の小説『東雲は瞬く』である。この小説の主人公である橋本明子のモデルは、周知のように明石の「癩病院」で患者のために献身的に働く大野悦子であり、舞台の中心は明石楽生病院である。そこには、1933年時点での賀川豊彦の「救癩」観が集約的に表現されているといえる。そこで、ここでは『東雲は瞬く』を手がかりに賀川の「救癩」観と竹内勅（楽生病院）の位置づけ・評価の特徴を検討していく。

### (1) 小説『東雲は瞬く』の構想の前提

まず、『東雲は瞬く』の出版に至るまでの賀川的主要なハンセン病関係著作には、①「MTLと新約運動」『日本MTL』第3輯（1927年2月）、②「社会問題として見たる癩病絶滅運動」『雲の柱』第6巻第3号（1927年3月）、③「癩病の友ダミエンを憶ふ」『雲の柱』第8巻第7号（1929年7月）、④「長編小説・東雲は瞬く」『主婦の友』第14巻第8号～第15巻第7号（1930年8月～1931年7月：連載12回）、⑤「一粒の麦」『日本MTL』第21～22号（1932年11～12月）、⑥「松澤村漫語」『日本MTL』第25号（1933年3月）、⑦『東雲は瞬く』実業之日本社（1933年6月）→『賀川豊彦全集 第16巻』所収（以下、『全集16』と記述）、などがある。



表2 賀川豊彦とハンセン病問題の関係史年表（『東雲は瞬く』発行まで）

年月日	具 体 的 活 動	出 典
1925.12.29 1926.1.27	賀川豊彦、全生病院を初めて訪問、光田健輔と三上千代に面会・懇談 東京YMCA会館の講演会で、小林正金「日本MTL」、賀川豊彦「残された仕事」、光田健輔「癩治療の国家的急務」を講演。	全集24 (50-51) 「日本MTL」第1号 (7)
1926.7.2 ～ 7.23	視力回復・伝道のため、7月2日に東京を立ち、草津の鈴蘭園（三上千代子宅）に3週間逗留・静養。鈴蘭園やコンウォール・リーの「救癩」事業を視察（7月24日大阪へ）。	全集24 (64-65, 594)
1926.8.6 ～ 8.31	再び、眼の療養とレブラ研究のため草津へ転地。「癩自由療養村」の人々と懇意になる。8月28日より4日間の日程で、日本MTLの同志（遊佐敏彦夫妻、鶴見欣次郎、鈴木洵、清水康、広畑隣助の5名）が視察に訪れ、レブラ患者専門の宿屋である浜名館・太平館で講演会を開催する。	全集24 (66,594), 『鈴蘭園』(84), 「日本MTL」第3号 (8)
1926.11.9	日本MTL静岡支部の事業援助のため、其枝教会主催で、賀川豊彦講演会が開催される。賀川は、「社会改造の理論と実際」「イエスと人間愛の内容」と題して2回講演する。	「日本MTL」第3号 (8)
1927.1.26	「癩病絶滅講演会」（＝日本MTL大阪支部講演会）を、大阪土佐堀キリスト教青年会館で開催。講師は、賀川豊彦の他に、中川大阪府知事、光田健輔、村田正太、牧野虎次など。賀川は、「社会問題として見たる癩病絶滅運動」と題して講演（『雲の柱』第6巻3号に掲載）。	「日本MTL」第3号 (8), 「大阪朝日新聞」第16226号 (9)
1927.5.26	無料施療患者の増加で経営が立ち行かなくなった明石の「癩病院」（＝明石楽生病院）の社団法人化を（法人化後は、「叢生病院」と改称の予定で）援助する。	全集24 (81-82)
1927.5 1929.4.5	草津・鈴蘭村の三上千代子女史後援会を起す。 大阪社会事業聯盟主催の「癩講演会」において、光田健輔、オルトマンズ、山田準次郎と共に講演。賀川は、「使徒ダミアン師を憶ふ」と題して講演（『雲の柱』第8巻7号に「癩病の友ダミアンを憶ふ」と改題して掲載）。	全集24 (596) 「日本MTL」第7輯 (9)
1929.11.27	日本MTL主催の「癩問題講演会」（於・東京基督教女子青年会館）で講演	「日本MTL」第7輯 (5)
1930.2.10	関東学院社会事業部主催の鈴蘭園後援映画会（於・関東学院）の宣伝のため、賀川豊彦の紹介状として「レブラに悩む人々の善き友、優しき姉、親切なる看護者として、上州草津の鈴蘭村に、健気にもその一生を捧げて居られる三上千代子女史を応援せられよ」と書く。	「日本MTL」第8輯 (7)
1930.8～ 1931.7 1932.7.3	「主婦の友」8月号より、宗教小説として「東雲は瞬く」の連載開始（1931年7月号まで12回連載） 7年振りに、全生病院を訪問し、重病室全部を院長の案内で慰問。礼拝堂で「人生の三種の神器」と題して講演。	全集24 (121,125) 「日本MTL」第19輯 (4)
1932.7.19	長島の愛生園を訪問、光田園長の案内で約3時間かけて島内を視察し、「荒浜の磯の小石に腰おろし ひとになつける犬を語りぬ」と詠む。	全集24 (149-150), 『長島開拓』(160)
1932.10.22	療養所拡張運動後援のため、青山会館において「一粒の麦の夕」が開催され、賀川豊彦、「一粒の麦に就て」と題して講演（入場者約2000名）。同夕の売上・寄付総金額1320円の中から、患者ホーム（十坪住宅）建設のために長島愛生園に465円、全生病院と鈴蘭園に各100円を寄付。	「日本MTL」第21(8), 第23号 (8)
1933.2.15	松澤教会でのMTLのための祈会で、「私は今『東雲は瞬く』という『主婦の友』に連載した小説を書きつけている」と述べる。	「日本MTL」第25号 (7)
1933.4 1933.6.20	「癩問題」の小説『東雲は瞬く』の校正を完了 『東雲は瞬く』を実業之日本社より出版	全集24 (163) 全集24 (603)

注) 「出典」欄の「全集24」とは、『賀川豊彦全集』第24巻を意味し、( ) 内の数字は頁数である。

次に、『東雲は瞬く』刊行までの賀川のハンセン病問題に関係する活動を整理したのが、表2である。表2より、『東雲は瞬く』の構想の前提となる賀川の「救癩」体験は、結局のところ光田の考え方とその影響下にある人物（三上千代ら）・病院（全生病院他）・施設（鈴蘭園ほか）との関わりが基礎になっていることが確認できる。

## (2)『東雲は瞬く』の特徴

次に、『東雲は瞬く』の特徴を整理すると、下記のようにまとめられる。

第一に、本書は、「主婦の友」に12回連載された部分（＝前半部：『全集16』298～405頁）と連載後に続編として執筆された部分（＝後半部：『全集16』405～487頁、以下頁数のみ記載）の大きく二つに分けて捉えることができる。後半部は、表2（1933.2.15）に記しているように、1933年に入って書き上げられたと判断される。

第二に、前半最後の「太陽は昇る」も、後半最後の「島の曙」も、ともに離島（前半は豊島、後半は長島）へのハンセン病患者の隔離収容による理想郷の建設を推進しようとしており、離島隔離を是としていることである。

第三に、福岡楽生病院（竹内勅）との関係で言えば、世界的大発見の「癩病」治療薬で、大儲けを夢見ている架空の医師（＝秋元行輝）が、架空とは言え、「楽生医院」（306頁）という名を3回使用することで、暗に「楽生病院」の竹内勅を想像させ、秋元と同類の大儲けをたくらむ罪深い医師として描かれていることである。

第四に、注目すべきこととして、「癩病」の治癒可能性を一定認めていることである。具体的に例示すれば、①「癩病はそう悲観する病気じゃないんだぞ!」と「猫いらず」で自殺未遂の井上に、矢野医師をして言わしめていること（430頁）、②「たとえ、病気にかかっているにしても、大楓子油があれば、初期の病気は大丈夫だ」（477頁）、③「レブラが治らないという道理がない」（478頁）、などである。

第五に、希望社とその「癩病運動」に対する評価・態度で言えば、その「偽善的行為」を批判をしつつも、肯定していることである。具体的には、実在の後藤静香（希望社社長）をモデルに、江上忠夫（有隣社社長）なる人物を「罵られる紳士」として登場させ、「癩病患者をだしに使って、全国の清浄無垢な青年男女の浄財を捲き上げるっていうのは少し酷いですよ」（425頁）と、江上（＝後藤）を批判的に描写していること、しかし後で「有隣社の社長の悪口をあんなにいふんじゃなかったかなア」（431頁）と見直し・訂正していることに現れている。

賀川と竹内の関係（面識の有無等）は不明であるが、結局、賀川は、分院の明石楽生病院と大野悦子については伝道小説のモデルとして直接体験等に基づき詳細に描写しているが、本院の福岡楽生病院とその院長・竹内勅及び看護婦・荻原水登の存在については知っただけで描くこともなく、実名で登場させる光田健輔には賛辞を贈る一方で、「楽生医院」（→「楽生病院」）を読者に想起させる）に対しては大儲けをたくらむ悪徳医師の病院として描き、きわめて否定的なイメージを読者に与えているといえる。

## 6. まとめと今後の課題

本研究では、従来の日本ハンセン病問題史研究においてほとんど無視されてきた竹内勅と楽生病院（福岡）に関係する事実を掘り起こし、その果たした役割の一端を実証的に解明してきた。「癩は不治に非ず」という竹内の主張・信念と福岡楽生病院における「癩病」治療実績は、竹内の秘密主義も災いして、当時の隔離主義を推進する光田健輔中心のハンセン病医療界から表面上はほとんど無視された観があるが、少なくとも1910年前後から1935年（それ以降については目下不明）に至る期間、有料病院（高額）ではあったが堅実な病院経営と「癩病」治療を一貫して継続し、折に触れて新聞報道や婦人雑誌で取り上げられ、貞明皇后の「御沙汰」による表彰者にも選ばれるなど、その存在は、民間における治療解放主義の系譜の中心線を形成していたことが確認できた。また、福岡楽生病院（本院）の分院として発足した明石楽生病院と同病院看護婦・大野悦子をモデルとする賀川豊彦の伝道目的の小説『東雲は瞬く』は、本院の福岡楽生病院が目指した治療解放主義の医療・看護の営為を無視し、その批判を内包するとともに、光田の離島隔離主義を容認・支持することを意図して構想・叙述されていたことも明らかとなった。別言すれば、『東雲

は瞬く』は、賀川（日本MTL）の立場が、治療主義を一定評価・肯定しつつも、隔離主義を基本的に容認・推進すること（→十坪住宅運動・無癩県運動への協力）を是とすることを広く読者（国民）に指し示す役割を果たしたといえる。

治療解放主義の系譜に関する今後の課題は、①竹内勅・萩原水登と福岡楽生病院に関するさらなる実証的解明、②青木大勇（長崎皮膚科病院長）の「癩病」治療研究・実践と隔離主義に対する批判・改善意見の検討、③大島療養所・九州療養所等が提起・推進した軽快患者の退所の取り組みの解明、等である。

#### 〈註〉

- 1) 筆者のこれまでの研究成果は、①拙稿（2009a）：1920年代の台湾におけるハンセン病問題に関する研究「研究論文集—教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集—」第2巻第2号、②拙稿（2009b）：日本ハンセン病社会事業史研究（第1報）—1922年のディーン博士の来日とその治療解放主義の影響の検討—「長崎大学教育学部紀要—教育科学—」第73号、31～42頁、③拙稿（2010）：日本ハンセン病社会事業史研究（第2報）—民間の隔離主義運動の成立・展開過程の検討—「長崎大学教育学部紀要—教育科学—」第74号、1～15頁、などである。
- 2) 隈部紫明・山下博（共著）『福博の人物第一輯』（福岡出版協会）1935年、31頁
- 3) 主な新聞報道としては、①癩研究に九州下り、姉崎博士の案内で乗気になったデ博士、霊薬発見の福岡の医師「東京朝日新聞」第13079号（1922.10.31）、5面、②布哇の癩博士が福岡楽生病院や熊本の回春病院を視察する「福岡日日新聞」第14011号（1922.11.1）、2面、③回春病院でデ博士を待ちこがれる、効果著しい癩病薬の注射、百人中七八十人全治「九州日日新聞」第12860号（1922.11.2）、4面、④癩病の妙薬発見、治って甲種に合格、来朝中のデ博士驚く「長崎新聞」第5889号（1922.11.3）、2面、などがある。①～④をふまえ、主に④を中心にまとめた。
- 4) 前掲、注3）—④より引用
- 5) ディン博士九大へ「九州日報」第11524号（1922.11.15）、2面
- 6) デ博士、福岡市より戸畑へ「九州日報」第11525号（1922.11.16）、2面
- 7) 前掲、注6）に同じ
- 8) 「主婦之友」第10巻第3号、153頁、1926年3月
- 9) 「主婦之友」第10巻第3号、151頁
- 10) 櫻根孝之進：癩病の初期には効果がある「主婦之友」第10巻第3号、154頁
- 11) 藤野豊編集・解説『近現代日本ハンセン病問題資料集成』（補巻6）所収、163頁
- 12) （彙報）治療本位の癩病院建設「社会事業研究」第15巻第1号、119頁、1927年1月
- 13) 神戸MTL協会創立「日本MTL」第9輯、6頁、1930年6月
- 14) 有料癩病院に唯一人、光栄に浴した萩原女史、福岡楽生病院看護婦、皇太后陛下の御下賜品を戴く／哀れな患者の友として十余年、萩原女史と竹内院長謹話「福岡日日新聞」第16928号（1930.11.19）、3面
- 15) 「秋田旭新聞」第7266号（1931.12.28）、3面（秋田県立図書館所蔵）
- 16) 「日本MTL」第34号（1930.11）、2～4頁。

（付記）本研究は、日本社会福祉学会第58回大会（2010年10月11日於・日本福祉大学）において発表した「1920年代のハンセン病問題と社会事業（第5報）—治療解放主義の系譜（楽生病院）の検討—」（『日本社会福祉学会第58回大会秋季大会報告要旨集CD-ROM』116～117頁所収及び当日配布資料）を改題し、修正・加筆（写真等は省略）してまとめたものであり、2010年度科学研究費補助金（課題番号20530507）による研究成果の一部である。